



イベント開催支援ツール 「ATND(アテンド)」の裏側

川崎有亮 ((株)リクルート メディアテクノロジーラボ)

小林賢司 ((株)リクルート 事業開発室兼メディアテクノロジーラボ)

ATND とは?

ATND^{☆1}は、(株)リクルートが提供する無料のイベント開催支援ツールです。ATNDは、2008年9月の公開以降、Web系・オープンソース系の技術勉強会・ 세미나を中心に約6,000のイベントの開催告知や、参加登録・キャンセルの受付にご利用いただいています。本セクションでは、我々がATNDを開発した背景や、機能概要・今後の展望を紹介します。

メディアテクノロジーラボの位置づけ

ATNDを運営する「メディアテクノロジーラボ」(MTL)はリクルートが2006年に設立した実証研究機関です。MTLの研究姿勢の1つとして、「オープン・イノベーション」が挙げられます。自社の研究所内だけに閉じて新技術・新事業を開発するのではなく、他者との協働によってイノベーションを実現する姿勢です。ATNDは、このオープン・イノベーションを推進していくために我々にも必要だったサービスと言えます。

ATND 誕生

リクルートは2006年からWebアプリケーション開発コンテスト「Mashup Awards」を開催しています^{☆2}。Mashup Awardsでは、参加する企業各社が共同で、開発者を対象にWebサービスAPIの最新情報を解説するセミナー形式の無料イベントを開

催してきました。全国各地でイベントを開催していく中で、開発者により近づくためにイベントを活用したい企業側と、情報収集や仲間と情報交換のための場所を求める開発者側双方に、技術勉強会の顕在ニーズを感じました。

そんな中、2008年5月、海外から複数のWebエンジニアが来日するタイミングに合わせて、日本のエンジニアと海外のエンジニアの交流の場を目指し、JavaScriptによるUI技術に関するカンファレンスの開催を企画しました^{☆3}。会場は、リクルートの会議室を提供することで、参加費無料としました。イベントを運営するには、会場のキャパシティの都合上、参加人数の把握は必要です。しかし、参加希望者を社外のシステムに誘導して参加申し込みしていただくのは社内ルールを厳密に適用すると個人情報保護の観点からいくつかの障壁がありました。参加者名簿を得るためのイベントではないので個人情報の収集は不要ですが、当時はそれに適したサービスが見当たりません。「なければ作るしかない」と最低限必要な情報のみを入力するWebフォームを備えたイベント参加登録受付専用システムを社内で作成しました。このシステムが原型となり、現在のATNDに繋がります。

当初は突貫で開発したシステムでしたが、ほかに

☆1 <http://atnd.org/>

☆2 <http://mashupaward.jp/>

特集「Web 2.0の現在と展望: Web2.0の情報アーキテクチャ」(情報処理, Vol.47, No.11, pp.1205-1213 (Nov. 2006))でも紹介。現在では国内64社が参加する国内最大規模のコンテストになりました。

☆3 「The JUI 2008 Tokyo」2008年5月19日開催。

も技術勉強会のセミナイベントの開催が続きます。その都度、参加登録の Web フォームが必要になることから、システムを汎用化することにしました。当時、技術力のある OSS コミュニティであれば自分たちでフォームシステムを開発したり、あるいは、より手軽な運営ならメールで受け付ける場合もありましたが、どちらも開発工数やメール運用のコストがかかるため、誰もが手軽にできる状態ではありませんでした。そこで、自社で汎用化したイベント参加登録システムをオープンにすれば、イベントを開催する他社や、一般のコミュニティ系イベントでも便利だろうと、一般公開に踏み切りました。これが ATND です(図-1 参照)。

ATND では、定型フォーマットを用いたイベント告知のためのページも手軽に作れる仕組みを加えました。イベントを開催する人も、イベントに参加する人も、どちらも使いやすい設計です。開催告知から参加者管理まで、我々にも必要だった機能をワンストップで提供しています。ATND では、ユーザが個人情報を心配せずに手軽に使えるように、ユーザ認証のログイン機能に OpenID を採用しています^{☆4}。参加者の個人情報をできるだけ収集せずに済むため、リクルートも管理上のメリットがあります。

余談ですが、実は社内的には、当時注目が高まっていた OpenID の技術検証を行うための実験サイトという名目で承認を取り、ATND のサービスを開発・公開しました。現在も ATND のロゴに「BETA」の文字が記載されているのは、「実験サイト」として分類されている社内事情が原因です。

Twitter 普及が技術勉強会開催を後押し

最初に自社で ATND を利用したセミナイベントでは、開催 1 週間前に告知開始したにもかかわらず、100 名を超える参加者を集めることができました^{☆5}。

☆4 現在は OpenID に加えて Twitter アカウントによるログインにも対応しています。

☆5 <http://atnd.org/events/33>「GINZA TECH LOUNGE feat. OpenID」2008 年 9 月 10 日開催。



図-1 ATND デモ画面

ちょうど国内でも先進的なネット利用者の間で Twitter の普及が進んだ時期でした。ATND に情報を掲載すると、Twitter 経由のつぶやき・RT (リツイート) で情報が広がります。ATND + Twitter の組合せで、低コストかつ素早くイベント告知を行えるようになりました。また、最近では、コミュニティ主催の技術勉強会に対して、自社の会議室やセミナールームを無償で会場提供するネット系企業も増えてきました。複数の企業の会場を借りて、毎月のように場所を変えて技術勉強会を開催するコミュニティもあります。以前から、OSS プロダクトごとのユーザ会や、企業が主催する技術勉強会は多く存在していましたが、イベント会場の確保から開催告知、参加登録者管理など、実現までのコストやタスクを考えると、事務局がじっくりと手間暇をかけて企画準備する必要があり、苦勞も多かったのではないでし

2 イベント開催支援ツール「ATND（アテンド）」の裏側

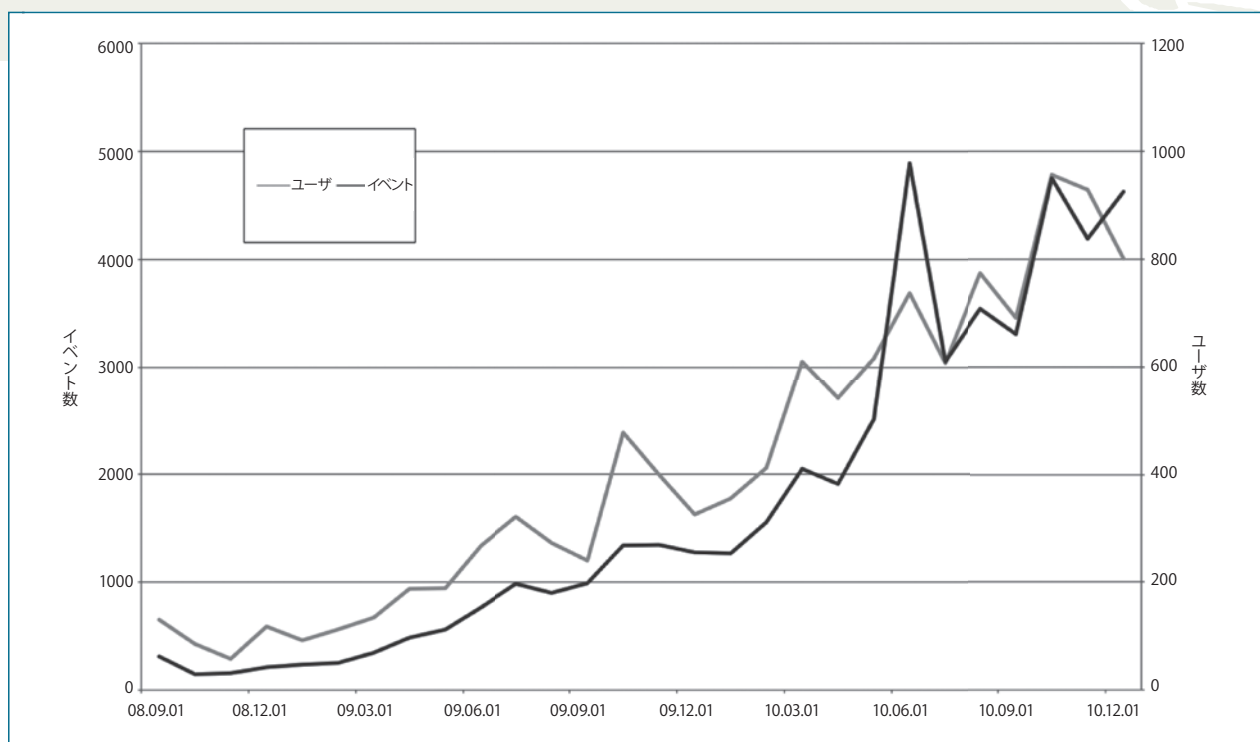


図-2 イベントとユーザ登録数の推移

ようか。現在では、会場提供に協力的な企業の会議室を無料で借り、ATNDで情報掲載と参加受付を行い、Twitter経由で広く素早く集客する…といった技術勉強会開催の定石パターンができてきました。このように、開催と参加の敷居が下がってきたことが、技術勉強会がより広がってきている背景にあるのではないのでしょうか。

ATND サービス紹介

ATNDをご利用いただいていない方のために、ATNDのサービスをご紹介します。

イベントを開催するにあたり、一番手間がかかりそうなのは、イベント告知ページや参加登録フォームの準備です。ATNDでは管理者が必要な項目をいくつか記述し登録することで、告知ページや参加登録フォームが作成されます。そのほか定員の設定機能や、参加登録時に簡単なアンケートを作成することができる機能、参加者一覧をCSVでダウンロードする機能などがあります。

ATNDは管理者のためだけのサービスではあり

ません。イベント管理がATNDに一元化されると、告知ページや参加登録方法が共通化され、特に迷うことなく参加登録することができます。また開催されるイベントの数が増え、参加する数も増えれば、自分がいままで参加してきたイベントを知りたいと思うかもしれません。この場合、参加者のユーザページを見れば、自分が参加してきたイベントのログを知ることができます。

ATNDの利用状況

ATNDはサービス開始以降、2年以上経ち、さまざまなイベントが登録されてきました。ここでは、ATNDの利用状況についてご説明します。特に注意書きがない限り、2011年1月時点でのデータを基にしています。

6,000のイベント、58,000のユーザ

図-2はサービス開始からの月別イベント登録数、ユーザ登録数です。イベント、ユーザともに増加傾

向にあります。

登録されているイベント数は約 9,900 件。イベントの作成はログイン後、必要な項目を入力すれば簡単に作成することができます。そのためテストで作成されることもあり、実際に開催されないイベントも数多く存在しています。2 名以上参加されているイベントが有効なイベントであると仮定した場合、現在登録されている全イベント約 9,900 件より、参加登録が 1 名以下のものを除いたイベントは約 6,000 件程度になります。

登録されているユーザ数は現在約 58,000 人。ATND では OpenID と Twitter アカウントでログインすることによって、ユーザ登録することができます。この 58,000 ユーザは、OpenID、Twitter アカウントでログインされたユーザ数をカウントしています。

図-3 は全ユーザのログイン方法別割合です。日本全体における登録アカウント数の割合とは若干異なり、Google や Twitter のアカウントで 60% 程度を占めています。Twitter によるログインは 2010 年 8 月にリリースしたのですが、約半年で 24% のシェアを占めるようになり、世間の Twitter 人気が見えます。

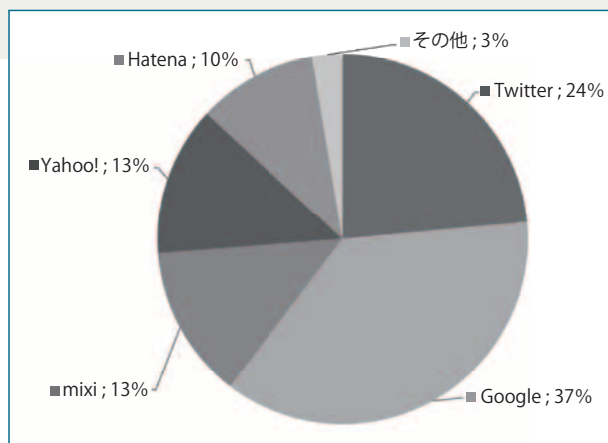


図-3 ログイン方法別ユーザ数

イベント規模とイベント数

ATND に登録されたイベントは、大体どれくらいの参加登録がされているのでしょうか。図-4 はイベント規模（参加者数）別のイベント数になります（イベント数は前述の 2 名以上の参加があるイベントを対象）。やはり ATND では技術書の読書会や、ハッカソン（Hack-a-thon：複数のプログラマが集まりソフトウェアをハックし最後に発表を行うイベント）など小規模なイベントが多いせいか、参加人

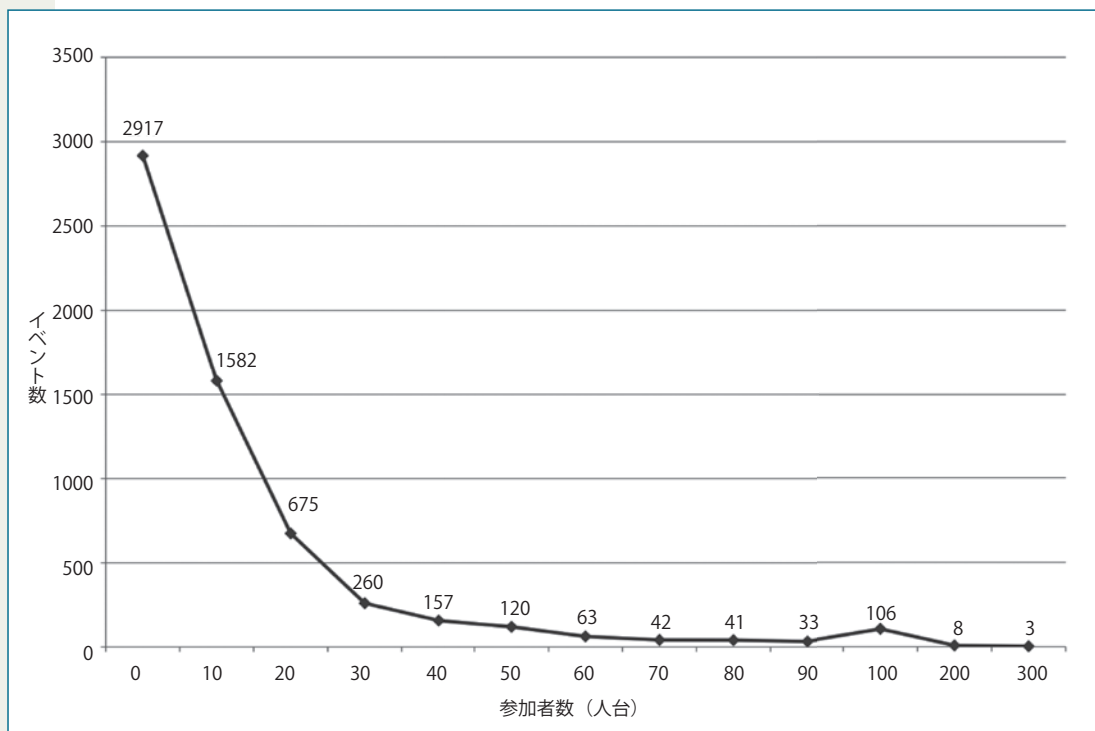


図-4 参加者数別イベント数

2 イベント開催支援ツール「ATND（アテンド）」の裏側

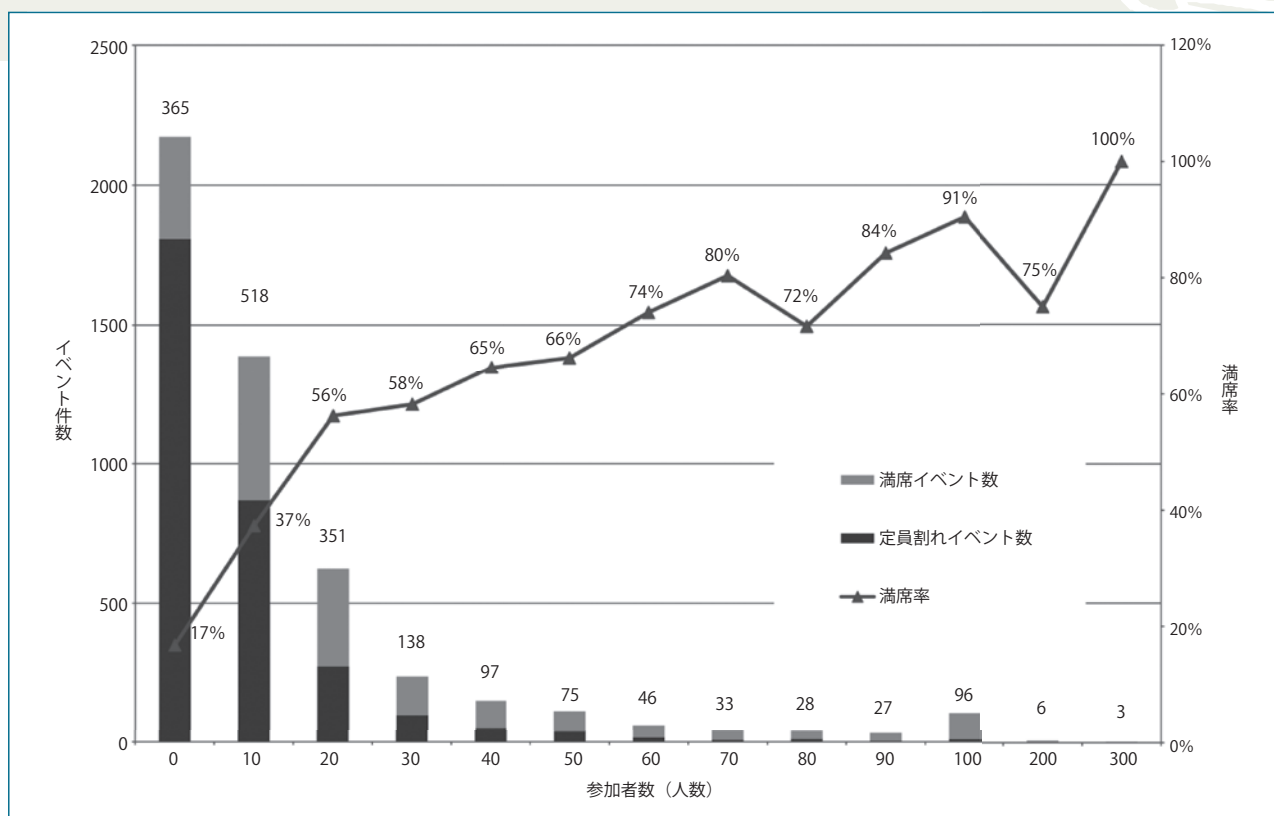


図-5 イベントの満席率と参加人数規模

数が少ないイベントが多く、大規模になるほどイベント数も減っています。ちなみに300人以上の参加登録のあるイベントは、「Hadoop Conference Japan 2009」^{☆6}、「第5回ジオメディアサミット」^{☆7}、「NOSQL afternoon in Japan 開催のお知らせ」^{☆8}などいずれも技術系のイベントです。そのほか、プログラミング言語に関するイベントである RubyKaigi や YAPC::Asia など有料の大規模イベントに乗じた派生イベントなどもあり、これらは元のイベントに集客力があるせいか、100名前後の参加があるものもあります。

またこのイベント規模と満席率について図-5にまとめています。満席率は、定員を設定したイベントの中で定員以上になった割合のことです。イベントの定員が少なければ満席率も高くなると思いますが、定員が多いイベントほど満席率も高くなっ

ているようです。

ユーザはどのタイミングで参加登録するのか？

イベント管理者にとってどれくらいの参加登録が行われるかは気になることです。図-6は参加人数の多かったイベント上位15件を対象に、イベント登録時からイベント開始時までの間を5期間に分け、どのタイミングで参加登録を行ったのかを割合で出したものです(y軸0がイベント登録時、6がイベント開始時)。イベント登録直後が一番多く、開始直前が若干増えているように見えます。おそらく登録時は、ATNDのイベント一覧RSSや、管理者さんの告知などでイベントの存在が目につれやすくなる時期であるため、参加登録が多くなっているのかもしれません。

☆6 <http://atnd.org/events/1848>

☆7 <http://atnd.org/events/3748>

☆8 <http://atnd.org/events/8460>

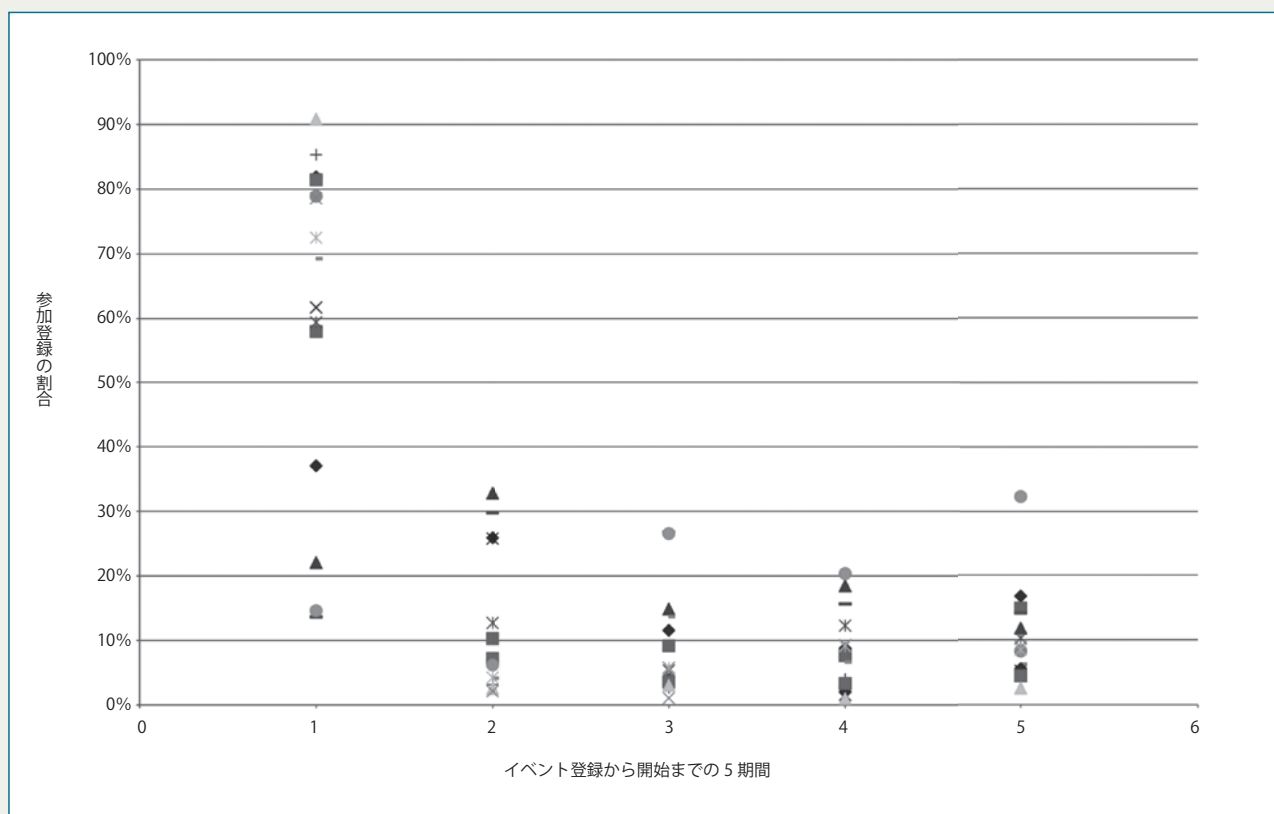


図-6 イベント登録から開始までの参加者登録割合

今後の ATND

世の中に有意義なイベントの数を増やすこと、これが ATND の目標です。イベントは、規模の大小は関係なくいろいろな人たちと一緒に何かを体験するものだと思います。その意味で近年台頭してきた動画中継サービス USTREAM は、実際に会うことなく何かを体験することができる、イベントの新しい形と言えます。USTREAM をオフラインイベントの中継として使うのではなく、USTREAM だけのオンラインイベントもよく開催されています。このような状況の中で、人と会って何かするということにはどのような意味が隠されているのでしょうか。これは、いままでオフラインでのイベント開催を支援し

てきた ATND が、今後考えていくべきテーマだと認識しています。

(平成 23 年 1 月 18 日受付)

川崎有亮 kawasaki@r.recruit.co.jp

1977 年東京生まれ。リクルートの実証研究機関『メディアテクノロジーラボ』所属。Perl・JavaScript・ActionScript を操る Web アーキテクト、Mashup Awards 主宰。近著に『ソーシャルストリーム・ビジネス』(共著・インプレスジャパン刊)。
<http://twitter.com/kawanet>
<http://www.kawa.net>

小林賢司 kenji_kobayashi@r.recruit.co.jp

1980 年東京生まれ。リクルートの実証研究機関『メディアテクノロジーラボ』(兼務) 所属。ATND の企画・開発・運営。
<http://twitter.com/knjko>
<http://knjko.org/>